



蕩物ガタリ話 下

こよみハーレム



「に、兄ちゃん、早くこの前み
たいに歯、一磨いてくれよお…。」

「よし、良い子だ。」

「じゃあ、ほら、あーん。」

「あ〜…」

「じゃあまず右〜…」

(シヤコシヤコ)

「ん、ん、んん」

はあああ、これこれ。

兄ちゃんに歯を磨いてもらおうと

すげえ幸せな気持ちに

なるう〜…



「はい左〜…」

(シヤロンシヤロンシヤロ)

「ん、んん、んあ」

ぽ〜

ああ、ダメだ、

気持ちいい〜……

頭ほ〜つとする…



「舌にも雑菌が

沢山付着してるからな

よく磨かないと」

(シヤヨシヤヨシヤヨシヤヨ)

「ああ、んあ、

はあ、はああ……」

はあ

ぽ〜

はあ

はあ

ああ〜…ヤバイ、

身体…熱い、

おまたのあたりが

ジーンとしてきた…



「はあ、はあ、はあ

に、兄ひやん、

お、おしまいかな？」

「…か、火憐ちゃん…」

ぽ〜

はあ

はあ

ぽっ
ぽっ
ぽっ
ぽっ

兄ちゃんどうしたんだろ？
そんなに息を荒げて…

「こ、今度は、

僕の“歯ブラシ”を

使おうと思うんだけど

ど、どうだ？」

「あ…」

ぽ〜

はあ

はあ

だ
キ
だ
キ
だ
キ

兄ちゃんのおち○ちん…





すごい臭い……

なんだかすごくくえつちな

臭いだあ……

ぽ〜

はぁ

はぁ

ポポポ



「はむっ、んくっ、んくっ」

口の中いっぱいだ

えっちな味が広がってく...

はむ

だっ
だっ
だっ



「んくっ、んっ、んっ、んくっ」

おいしい、

兄ちゃんのお〇んちん

おいしいよお…



「んっ、んっ、んっ、んっ、んっっー！」

な、何!?

急にスピード上げて、

く、苦しいっ……



ゴクド

「エロエロ」

「エロエロ」

エロエロ
エロエロ
エロエロ

「んふーっ、んふーっ…!」

うへ、何だコレ、青臭い…

「火憐ちゃん、

そのまま、ゴックンして」

え？コレ飲むの？…





「はあ、はあ、ごめん兄ひやん、
飲みきんない。。。」
喉に絡み付く。。。

ぽ〜

はあ

はあ

はあ



「に、兄ちゃん、

さっきからおまたがジーンジーンと

すごく切ないんだ。

どうしちやっただら？あたし。」

はあ

はあ

タン



「どれどれ？」

「うーん…うーん……」

よし。」

触つて…」

兄ちゃんあたしのアソコに

触つてくれえ…」

はあ

はあ

ドキ
ドキ

タン



「え？に、兄ちゃん？
あたしの歯ブラシを
どうするんだ？」



「ま、まさるか!?!」

ピッ...



ビク

ゴシツ

ズブ

「んあああああああ!!!」



「あああああああつ!?
に、兄ちゃん何をおおお…」



何コレ？変な感じし…。

う〇ちが出たり入ったり

してる感じに似てるけど…

もっと別の感覚も混じってるっ

ジュッ
ジュッ



「あああああああ

あああああああ

ヤバイ、なんか変だ、アソコの

ジンジンが強くなってきた！

何かがこみ上げて…

ドク

ドク

ドク

ジュグ
ジュグ

ジュグ
ジュグ



「イッてぎんーんーんーん」!!



はあ

はあ

はあ

はあ

「はあ、はあ、
兄ちゃん…すごい…」
「火憐ちゃん…
僕…、僕…」



「え？兄ちゃん？ちよつと待つて
挿入れちやうの？」

「ごめん、火憐ちゃん。

僕もう我慢できななんだ！」

兄妹でそれは

ヤバいんじゃないの？

はあ

はあ

ドキドキ

びっびっ

ピト...



てか、

ビクビクってなったせいなのか

アソコが敏感になっちゃってる...

今、挿入られたら、

どうなっちゃうんだろ...

はぁ

はぁ

ドキ
ドキ

じゅ
じゅ

ピト...



ゴキウ

ボク

ズブッ

【おっぱい】



「あああつ、

兄ちゃんっ、

兄ちゃんっっっ！」

「うああ、

火憐ちゃんの膣内、やべえっ！

「すげえ気持ちいい！」

ドク

ドク

ドク

パンチパン

パンチパン

パンチパン

パンチパン



あああ、ダメエっ！

そんなに動かないでっ！

身体のビクビクが

止まんないよおっ！

ビクビク

ドク

ドク

ビクビク

ビクビク

ドク

ビクビク



「火憐ちゃん！」

「火憐ちゃん！火憐ちゃん！」

「兄ちゃん！」

「兄ちゃん！兄ちゃん！」

「ダメエー！飛んじやうつ！」

「飛んじやうよおつ！」

ドク

ドク

ドク

パン

パン

パン

パン

ジュウ
ジュウ

ジュウ
ジュウ

ちよつと、お兄ちゃん、

妹にこんな格好させて

どういうつもり！」

「いや、先日ちよつとあつたんで、

身体検査だよ。」



まさか、


上半身が吹っ飛ばされたとは

言えないよなあ……

「別に私なんともないよっ！」

「いや、念には念をだな！」





「どれ」

「わわわわ、

なんで馬乗りになる必要があるのよ！」

「いや、上半身を調べたいから、

この方が良いんだよ。」



「それじゃ、失礼して。」

「ちよ、ちよつと

なんでおっぱい触るのよう!?」

「いや、だから念には念をだなっ!」



ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

「.....」
「.....」

「ちよつと、」

お兄ちゃん妹のおっぱい触りすぎ……」

「ん、ああ……なんか、つい、な？」

やだ……、そんなに揉まれたら、

変な気分になつてきちゃうじゃない……。





「な…、なんで舐めるの？」

「いや、なんとなく…、嫌？」

「……別に。」

「なんだろう…すごく心地良い感じ…。」

「お兄ちゃんのごせに…。」



「んふ…んっ」

あれ？あれ？なんか変だぞ？

月火ちゃん滅茶苦茶可愛いぞ？

やだ、そんなに先つちよばかり

責められたら…



「はあ、はあ」

勃起しちゃった…!

「っ、月火ちゃん！」

はあ
はあ

はあ
はあ

ピュッ

ん



「ふ、今度は、

はま

はま

僕のこれ、舐めてくれないか？」

「あ…」

お兄ちゃんのおち○ちん…

すごい臭い…エッチな臭い…



ぽ〜

ぽぽぽ

ちよつとしょっぱい…

頭ほーつとなる変な味…

「ああ、月火ちゃんいいよ、

そのまま啜えて」



ぽ〜

はむ

おつきい、

口の中お兄ちゃん

おち○ちんでいっぱい



ぽ〜

ま。ま。は。

「んん、ふんっ、んん」

ま。ま。は。

「月火ちゃんの中の口の中、

す〜く〜ら〜よ」

お兄ちゃん気持ちよさそう、

なんか嬉しいな

も〜

も〜

「やべ、月火ちゃんっ!!!」
「んんんんっ!?」
や、ダメエー!乳首キユってしちやー!

キユ

ジユガ
ジユガ

ジユガ
ジユガ

キユ

キニ

キニ

キニ

キニ



「……」

「……」

ド
ン

ク
ク

ン

ゴ
ゴ



ぽ〜

「はぁ、はぁ」

はぁ

はぁ

ドホ
ドホ

なに今の…
乳首キュっつてされて
そしたら身体がビクンっつて…

「月火ちゃん、すごく良かったよ」

トホ

「お、兄ちゃん、

ね？も、いいでしょう？」

「はあ、はあ、

いや、

まだ下半身のチエックが

終わってないよ』

はあ

はあ

ヒン ヒン



「あれ？なんだこれ？」

「やっ!?」

キュッ

ゴッ



「これ？クリオリス…だよなあ？」

「普通より少し大きくないか？」

「あつ、ああつ、

「お兄ちゃん、ヤ、ダメそこっつ!!」

「なにコレなにコレ!？」

「刺激が強すぎっつ!!」

キュッ

ゴクゴク



「お願いっ、やめて！」

さっきのビクンがまた来ちやいそうだよ！」

「えっ？また？」

さっき乳首だけでいつちやつたのか!?

ヤベエ、興奮してきたっ!!

くり

くり



「よし、月火ちゃん、

またそのビクンしようねっ!

こっちもいじつたらすぐだから」

「えっ!? なになに!?」

「やだああああああ!!!」

「来るっ! 来るっ! 来ちゃようよおっ!!!」

モロモロ

クチュ
クチュ

くら

くら

クチュ
クチュ



「……………んんーんーの!!!」

ゴクゴク

ゴ
ミ
ヤ
ヤ
ヤ
ヤ

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク





「はあ、はあ、

あ…、ああ…、あ…」

もう、ダメエ…

はあ

ゴクゴク

ヒクヒク

はあ
ゴクゴク

ゴクゴク

『よし月火ちゃん、

今度は膣内を調べるよ？

コレが最終チエックだ！』

『ほう、ひやらよお…』

これ以上したら、壊れちゃうよお…

はま
ゴクゴク

はま

ゴク
ゴク

ピト…

クチュ
クチュ

ゴク
ゴク



「んひんはまーの?」

ジュッ

ゴッ

ゴッ

ジュッ



「ああっ、ああっ、

ああ、ああ、あ

や、お兄ちゃん激しいっ、

また、大きいビクンが来ちゃうっ!!

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ハァハァ

ハァハァ

ハァハァ

ハァハァハァハァ



「おおお、月火ちゃん、

イクぞおおおお！」

「わ、わらひもおおお……」

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

パニ

パニ

パニ

パニ

パニ

パニ

ジメ

ジメ

ジメ

ジメ



「イクっっ!!!」

「んほおおおおおおおおおおっ!!!」

「イクっっ!!!」

ゴ
ミ
ヤ
マ
マ
マ
マ
マ
マ

ビ
ク
ド

ゴ
ク
ド

ゴ
ク
ド

ゴ
ク
ド

ゴ
ク
ド

ゴ
ク
ド
ン
ゴ
ク
ド

ゴ
ク
ド

「あ…、あ…」

「…ふう、月火ちゃんにの身体に

何も異常がなくて良かったよ！」

ゴク

ドク…

ヒクヒク

ゴク

はま

はま

ゴク

はま

ゴク

ゴク





「ほら、どうしたの？」

鬼のお兄ちゃん？来なよ。

こんな大胆なポーズをして

誘っているのに、

鬼のお兄ちゃんは何もしない

つもりなのかな？



それとも、

何も出来ない腑抜けなのかな？」

「ふむ、そうまで言われちゃあ

仕方がない。僕も男だ。

■の一人くらい満足させてあげよう。」

「お客さあん、ムチムチだねえ、
良いモモしてるねえ〜」
「鬼のお兄ちゃん。」

それはマツサージのつもりなのかな？
悪いけど全然気持ちよくないよ。」

さっ
さっ

「ジュ」はどうかかなあ?」

「テクニツクの欠片もないね、

局部をいじれば、

女はみんな悦ぶと思つたら

大きな間違いだよ」

ひどい言われようだ。



「でも、ほらあ、」

「こうしたらどうかな?」

「はあ、まったくもって気持ちよくない。」

鬼のお兄ちゃんは何か

リアリティのないエッチな本の読みすぎなのかい?」

むむ、少し自尊心が…

ムム

ムム



「でも、アレだなあ、
斧乃木ちゃんのココロは
モリつとしてで、
今までの娘と全然違うなあ、
プニプニしてて可愛いよ。」



「いやはやココまでとは。」

行為の最中に他の娘の話なんて論外だよ。

鬼のお兄ちゃんはもう少し女心を

勉強した方が良い。」



「まあ、僕は

鬼のお兄ちゃんのコトなんか
なんとも思つては
いないんだけどね。」

うーん、なんだろう、
自分から誘つておいて。

このツンデレなのか？



「あれ？」

「.....」

なんか染み出来てね？
濡れてね？



「えっと、直接触りたいんだけど、
タイツどうするの？」

「おっぱいも見たいなあ。」

「タイツの替えはいくらでもあるから、

破いてくれて構わないよ。

「ワンピースは自分で脱ぐよ。」

じゃ...



「さ、これで良いかな？」

「次はどうするの？」

「それじゃ……」

「綺麗なピンク色だね、

小陰唇もこんなに小さい」

やっぱり少し濡れてるじゃん。



くはぁ



「斧乃木ちゃんのココ、
おいしいよ。」
「.....」

「クリ○リスも皮被ってて
可愛いなあ。」

「.....」

あれあれ?どうしたのかな?

全然しゃべらなくなっちゃったぞ?





「ソフー、ソフー、」

あれ？顔が真っ赤だ、

乳首もクリもビンビンだし、

息も少し上がってる。

やべえ、興奮してきた！

ソフー

ピュコ

ソフー

トク



「よし、じゃあ今度は

膣内いじるね。」

「す、好きにし、なよ。」



「ん、んふ…」

「どう？？気持ちいい？」

「ぜ、全然、

き、持ちよくない、よ。」

の、わりには声震えてる、よな？

ひびく
ひびく



「ほら、コレならどうかな?」

「ぜ、んぜ…んふ、ん、」

効いてる効いてる。

ひびく

ひびく

ひびく

ひびく

ひびく

ひびく



んんっ、
んんっ、
んんっ、

おお、
縮まってきた！

イキそうなのかな？

ジュジュジュ
ジュジュジュ
ジュジュジュ

「きんぎょさん」

ゴクゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴキウ

ゴク



「すごい潮だったね。」

「気持ち良かった?」

「し、お吹かせた

程、度で、いい気に、

ならないでよ、ね。」

僕、はイってないし、感じ、て、ない。」

強がっちゃって、可愛いなあもう。



「おはよう」

「ん？な、誰？」



「ん？」

「ん？」

「じゃあ、挿入れるよ。」

「……………」





「んーっ!!!」

「んっ、いつ、んんっ、ん」

「ああ、

やっぱり斧乃木ちゃん、

すげえ締め付けだよ。

なんか、膣内ビクビクし

てて気持ちいいなあ。」

ゴクゴク

パンパンパン

パンパンパン

ゴクゴク

パンパンパン

ゴクゴク



「べ、別に、さしき、

いった、ばかり、とか、

そういう、のじゃ、

ないか、ら。

いつて、ないか、ら。」

素直じゃないなあ、

逆に興奮するんだけどね!

ゴウゴウ

パチパチパチ

ゴウゴウ

ゴウゴウ

ゴウゴウ



「あああああああつ!!!」

「うあ、

急にまた締め付けてっ!

またイキそうなんだね!!?

僕もイクよおっ!!!」



「……ん」

「あ、ああ、あ……」

「鬼の、お兄、ちゃんほ、
ダメだ、なあ……こんなだ、
簡単、に浮気して。」

「く」

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク

ゴクゴク……

ゴクゴク

はあ

はあ



「信頼、関係、

とか、そういうのって

こころもたやすく

壊れるもの

だつて、とを、

身体を、はって教えて

あげた、かったの、さ。」



「そんな」といいから、

ピースしてピース。

ほら横ピース」

「び、びーす。」



「さて、お前様よ、儂に何か言っておく」とはないかの？」

「え？えーと…な、何のことかな？」

「ほほう、シラを切るつもりか、

お主がこれまでに数多の女子たちと何をしようが儂は目を瞑ってきたが」

「数多って…（上）は無関係だぞ！」

前書き（はじめに…）でも製作者が言ってた！

そう、コレはパラレルワールドなんだ！」

「ふむ、一万歩譲ってそうだと、生涯のパートナーである儂を

さしおいて、あんなよそ者の式神（古）と行為に及んだコトについては、

少々黙ってはおれんな。」

「いや、だからアレは不可抗力と云うか、

ハメられたと云うか、ハメたと言おうか。」

「儂よりあんな（古）の方が良いのか、そーかそーか。」

「いや、忍ちゃんの方が良い！忍ちゃんがサイコー！」

「ん？すまんがよく聞き取れなかった、もういつペン言ってもらえるか？」

「忍ちゃんがサイコー！」

「ああ、すまん、もういつペンかの？」

「忍ちゃんがサイコー！忍ちゃんが可愛い！忍ちゃんがステキ！」

「儂とやりたい？」

「やりたい！やりたい！」

「むしろ忍ちゃん以外とはやりたくないくらいです！」

「ふむ、そこまで言われてしまうと、断りきれんなあ。」

「来る者拒まず！それが儂という女じゃ。」

「しかしアレじゃな、蝸牛、**式神**といい、**式神**といい、儂といい、

式神体系に興奮するとはお前様は真性の変態か？」

「はい、僕は変態です！」

「ふむ、では変態にふさわしく、まずは僕のこの足でしてやろう。」

「ホレホレ、どうじゃや？の足は？柔らかくてプニプニじゃろう」

「うはあー！」

柔らかい足の裏でされるのがこんなに気持ちいいとは…



「おう？なんじやお前様、もう我慢汁が滲んでおるぞ、

そんなに僕の足が良いか、この変態め。」

「はい、忍ちゃん足サイコーです！」



「ん、んっ?」

む、まずいの、ペアリングのせいで、

こっちにも感覚が伝わってくるわい。



「んっ、んっ、んふ、んんっ、ん…」

あれ？忍の様子が変だな、

ああそうか！それなら…



「あああ、こゝら、こゝら、今ソコを摘むでないいつ!!!」

この感覚、あるじ様の絶頂が近いのかつ、

このままでは“両方”達してしまおうっ!!!

「おおお、もう、出るぞっ!!!」



「おんのおん」

「いっせんせん」

「ゴクン」

「ゴク」

「いっせんせん」

「ゴク」



「はあ、はあ、お、お前様、知っててわざとしおったな……。」

「いや、忍にも気持ちよくなってももらいたかったからな。」

「ま、まあ、別に良いのじゃがな。」

はあ

はあ

ドゥ...

ぽぽ

「よし、この体液を取り込めば…」

「ん？」

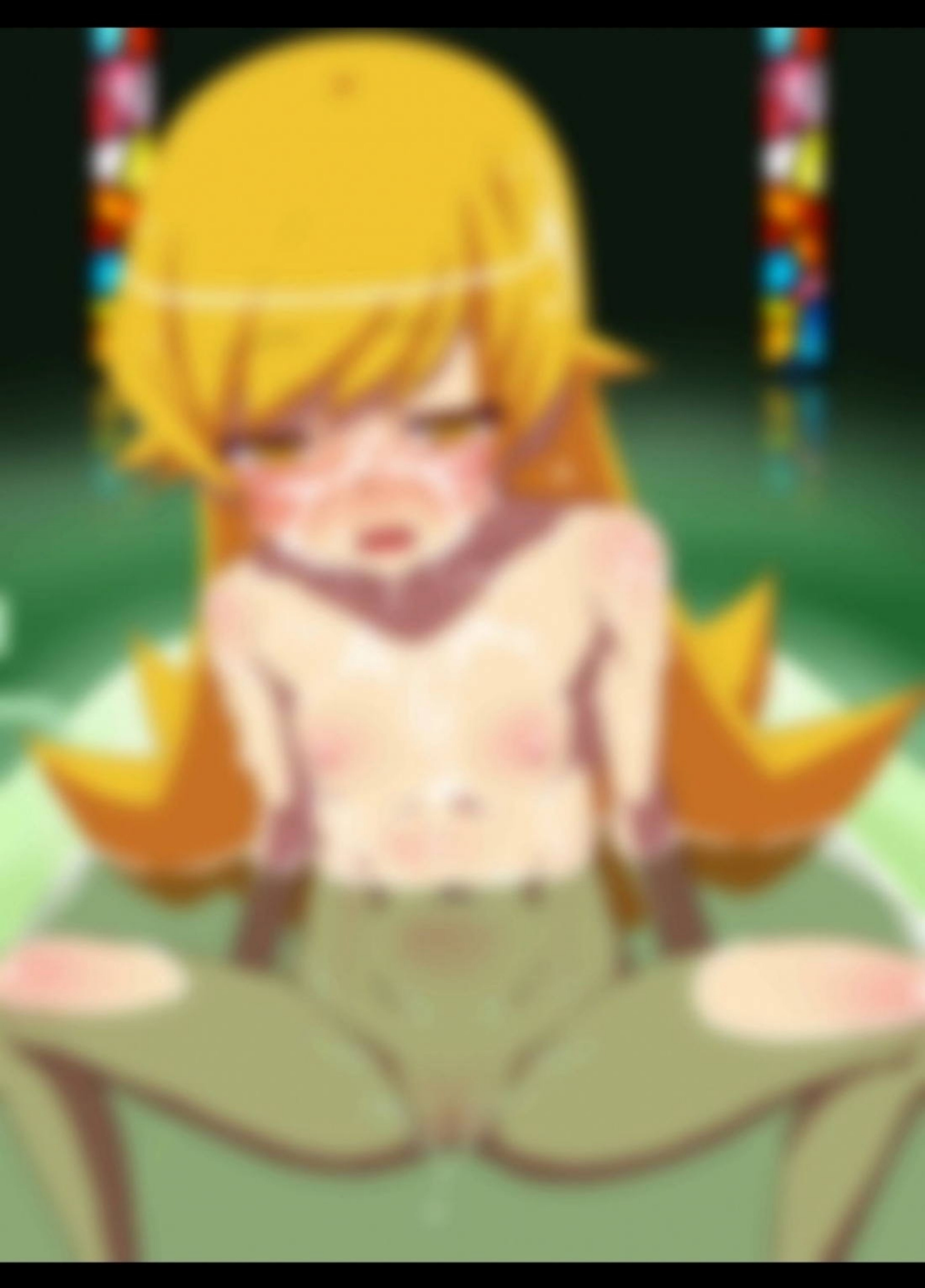


はあ

はあ

ドゥ...

はあ







「ほれ、この通りじゃ。」

「おおお!?」

「どういふことだよ!?!」

「血にせよ、肉にせよ、体液にせよ、

お主の一部分を取り込めば

そのまま僕の力になる。

まあ、あの程度では

外見を変えるコトしか出来んがの。」



「ほれ、ほれ、

何をボケつとしておる、

好きにして良いのだぞ？」

「じゃあ、まず…」

「ん？なんじゃ？」

「ほら、前に言ってた、より強い服従の証だよ。」

「コレがやりたかった！」

「お前様らしいの。」

ジュリ



「ん…」

「うはあ、すげえ手におさまらねえよ。」

「柔らけえ、それでいて弾力のある…。」

「よく見ると乳首陥没してるな。」





「ん…んよ」

ふふ、赤ん坊のように必死に舐めおつて、
可愛いものよ。

ムムム

ムムム



「あゝ、はあ」

うむ、なかなか良いぞ。



「んんっ！ん、ん…」

あ、こら、そんなにほじくったら…

くら

くら

くら
くら



「はあ、はあ、あ…、あ」

「勃起った勃起った」

「乳首が勃起った！」

「僕の乳首はクララか！」

はあ～

はあ

はあ

ぴん



「忍、今度は僕の、良いか？」
「う、うむ。」

ほ〜

はあ

はあ



我があるじ様のイチモツはものすっごい臭いぢやのう…
これでは、人間の女子がヨロツと随ちるのも
無理ないの。
ある種のテンプレーション…
これも“後遺症”かの。



「んっ、んん、んふ、ん…」

「うはあ、忍、すげえ、舌が絡みつくっ！」

ペアリングのせいで、

自分のモノを舐めているような感覚じゃ…。

なんというか、俗に言うセルラフェラというのは

こういう感覚なのか。



「くっ、Picoー」
「んんんんんんんんん」



本当におっぱいが好きじゃのう、
我があるじ様は。
しかし、セルフラエラに加え、
セルラパイズリとは滅多に
体験できることではないの。
すごい感覚じゃ。





「んっ、んっ、んっ、んっ、んっ！」

この感覚…もう達するの…、儂も…

「忍っ！、忍っ！」

ジュー
ジュー

ジュル
ジュル

ジュー
ジュー



「んんんんん」

「んんんんん」

ゴクゴク

ゴク

ドクドク

んん

んん

んん

「はあ、はあ、

さっき出したばかりだということに

すごい量じゃの、

今度ばかりは飲みきれんぞ……。」





「はぁ、はぁ、
す、少し休憩せんか？
ご存知の通り、ペアリングのせい
で僕はさつきから
あつちでもいっつちでも
達しつぱなしじゃ。」

ぽ〜

はぁ

はぁ

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク

ゴク
ゴク



「お、おい、

聞いておるのか？

我があるじ様よ？」

「ダメだよ忍、

忍のこんな姿見てたら

我慢出来るわけないよ。」

「ちよ、ま...」

ぽ〜

はぁ

はぁ

ゴウゴウ

ピク

ピク

ゴウゴウ

ピト...



「ジュウジュウジュウ!!!」

ジュウ

ジュウ

ジュウ

ジュウ

ズブズブ



「はぁ…、このまま動かずに、
す、少し休、もう…」
ダメじゃ、
さつき達したばかりじゃから、
局部が敏感になっておる…。」



「ああっ、 あああっ、 あ、
あるじ様よ、
やめ、 やめぬかああっ」
『そーいう忍の反応も
めちやくちや可愛いくて！
俄然腰に力が入るっ！』
ダメじゃダメじゃ！
すぐにでも達してしまおうぞっ！

ポッポッポッ

ポッポッポッ

ポッ

ポッ

ポッポッポッ

ポッポッポッ

ゴク

ポッポッポッ

ゴク



「あああああああああああつ!!!」

「忍っ!忍っ!忍っ!」

来る!来る!来るっ!



「いつ、
んぐーーー!!!」

「RんーRんーRんーRんー」



「はあ、はあ、はあ、はあ……」
「また、イっちゃったんだね、忍。」

ほ〜

はあ

はあ

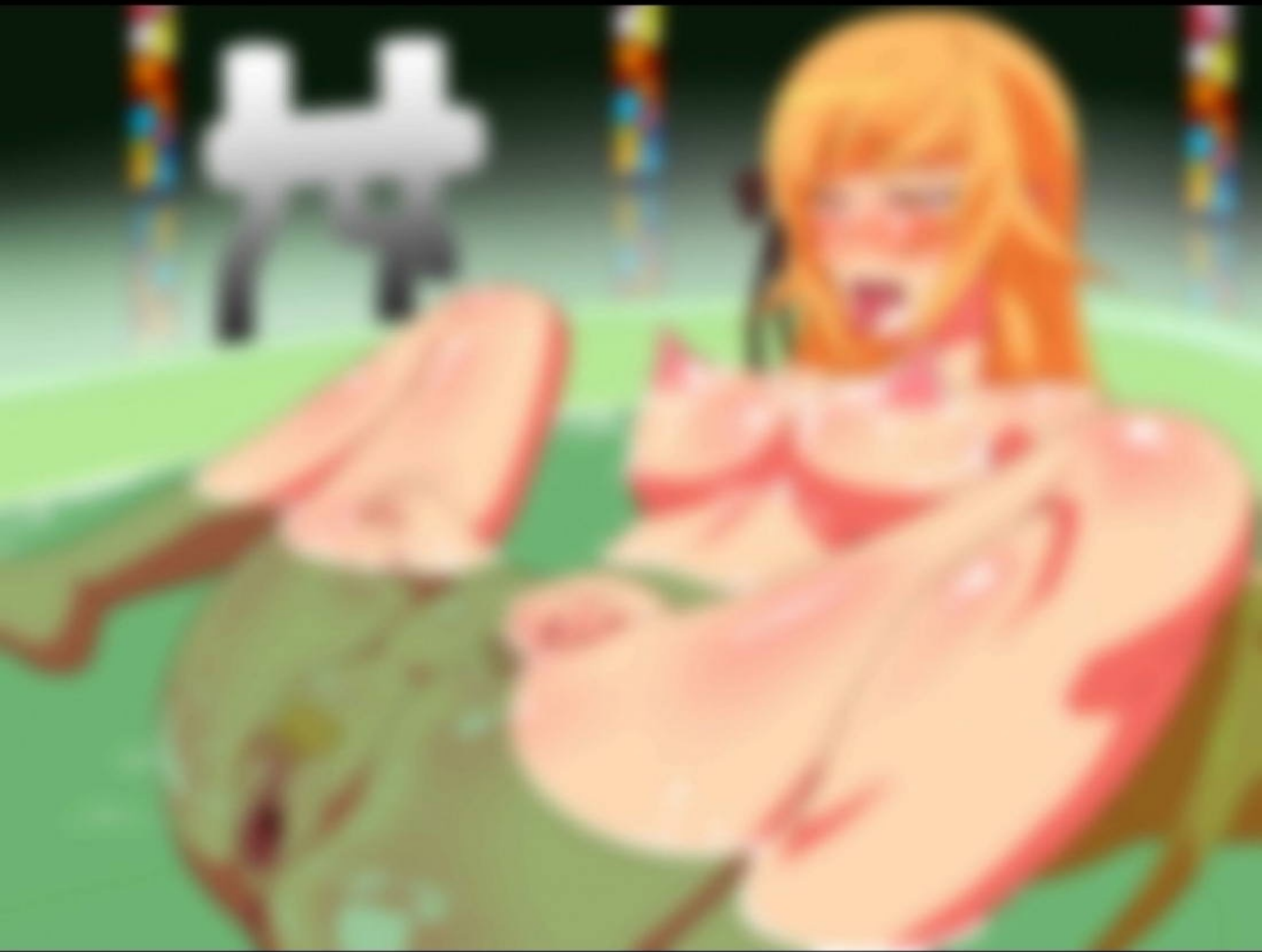
ゴク

ゴク

ゴク

ゴク

ゴク







「って、えええ!!お前身体がつ!!」
「はぁ、はぁ、
達しすぎれ、もろって、
しま、ったわい。」
「おま、身体が縮んだせいで、
すげえ締め付けだつ!!!」

ぽ〜

はぁ

はぁ

ビク

ビク

ビク

ビク

ギク

ちゅ

ギク



「おおおおおおっ!!!」

「も、やめ、ああぁああぁっ!!!」

「ごめんっ!!」

「僕、まだイってないからっ!!」

「あ、あ、あぁ、あぁぁっ!!!」

「忍——っ!!!」

ボク
ボク
ボク

ボク

ボク

ボク

パン
パン
パン

パン
パン
パン

パン



「ズズズズズズ」

「イクっ!!!」

ゴクゴク

ゴク

ゴクゴク

ゴク

ゴクゴク

ズズズズ

ゴク

ゴク

ゴク



なるほど…、
我があるじ様の性欲は
ものすごいものじゃ…。
これは独占していたら
身が持たんの。

「あ、
ああ、
あ」

ぽ〜

はぁ

はぁ

どく

どく

どく

どく

どく

どく

どく